

佐賀純一氏「絵と和歌による癒しの世界」を講演

第9回癒しの環境研究会全国大会 平成21年2月27・28日

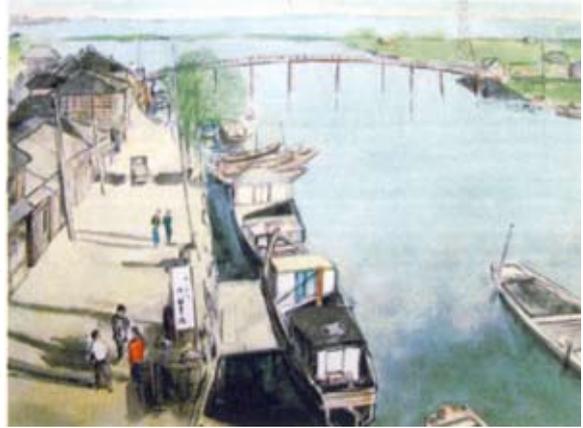
土浦協同病院主催 「市民公開講座・文化講演」 霞ヶ浦観光ホテル 28日(土)

◆父・進氏と自身の絵を用いて講演

佐賀純一氏の市民文化講演会は、会場の入口に佐賀氏が描いた墨絵が壁面いっぱいに展示されるなど設営に工夫が凝らされた。講演では佐賀氏の墨絵とともに、霞ヶ浦、土浦周辺の風景や人々を数多く描いている父・進氏の絵が数多く用いられ、在りし日の思い出が語られた。

進氏の霞ヶ浦の絵は、真っ白い帆掛け舟と鮮やかな青の湖水を湛えているなど、かつての美しい風景を伝えていた。

佐賀氏は、会場となった霞ヶ浦観光ホテル周辺の湖畔に現在も架かっている橋で、それが木造だった頃の父の絵を見ながら、「友だちとこの橋の上から飛び込んで、近くを通る船につかまって泳ぐ遊びをしました」と少年時代を語った。



霞ヶ浦観光ホテル前の橋の絵 佐賀進氏画

◆学問と肉体の鍛錬は「癒し」には役に立たなかった

外科医になって程なくして重度の腎炎に罹り病床に臥した佐賀氏は、肉体の苦痛と、肉体が壊れていく恐怖、自分を担当した医師への期待と失望、極度の不安、世界からの疎外感に襲われたという。その時「医療と患者との間に《越えがたい壁》がある」「医師は診療・研究・学会・論文と日常が極度に多忙、さらに死と病が日常化していて、一人ひとりの願望に応えることは不可能な状況がある」と痛切に悟り、厳しい勤務医の就労から逃れるようにハワイに渡ることを決意した。

ハワイでの勤務時間には厳格な区切りがあったという。勤務時間以外はまったくの自由。美しい自然と解放された学問の場で、世界中から集まった医師と楽しい時間を過ごした。

が、ある日突然、重度の心筋梗塞に見舞われた。目が覚めると息が吸えない。恐怖、死と隣り合わせ、絶対安静・・・「それまで研鑽してきた学問や登山で鍛えた肉体が、自分の病気には役に立たないことを悟りました」と語った。



会場入口には佐賀氏の描いた墨絵が並んだ

◆優しさには癒す力がある

佐賀氏の病状を案じた日系二世の担当医は、窓からの眺めのいい自分の部屋のプライベートベッドを佐賀氏に提供したという。「優しさには癒す力があります。ストレッチャーでハワイを離れるときも《必ず生還して》とみんなに抱きしめられ、生きる希望をもらった」と、二世医師の部屋から見える窓の景色



講演する佐賀氏、右は自身が描いた墨絵模写「ソクラテスの死」ジャック・ルイ・ダヴィッド作

を撮影した写真を見ながら語った。

帰国後も絶対安静。退院後も発作がおきる中、具合のいいときは土浦の生家である父の医院で外来診療や住診を行ったが、霞ヶ浦の水質汚濁に驚き、病状が完全に復調しないまま自然保護の市民運動を行った。また患者さんたちの日常の知恵の高さや、見事に生き切っている姿に感銘を受けて、『土浦の里』『浅草博徒一代』など聞き書きの作品を多数著して出版した。

◆「なぜ生きるのか、死んだらどうなるのか」の答えに出会った『古事記』

しかし何をどうやってもよくなるしない心筋梗塞の発作に見舞われる中で、「人はなぜ生きるのか。死んだらどうなるのか」という疑問に直面し、このころ哲学書や宗教書を多数読んだという。そして日本の古典である『古事記』にそれが書かれていることを知った。

佐賀氏は「これほど重大な問題を扱っている書物なのに、現代人や現代医学が『古事記』に無関心なのはなぜか」といふと、『古事記』は難解で、学者間でも解釈に異論が百出し、定説がない。医学とはまったく無関係なものと誤解されています」と語った。佐賀氏は何年も『古事記』と向き合って論文を書き、それらの集大成が後に『変容する神々』『蛭子』となって出版された。

◆「病、には日常を突き抜ける力の根源がある

『土浦の里』に全頁にわたって挿入されている進氏の絵は60歳から描き始めたものだという。佐賀氏が描き始めたのは55歳。どうしても描きたいとの一念で「ミケランジェロとダビンチを師匠にした」と語ると、会場からは驚きの声が上がったが、最終的にダビンチの『最後の晩餐』の模写を書き上げた映像が映し出されると、一斉に拍手がわき起こった。佐賀氏は、「病は日常を超越する力を生み出す根源の場です。日常のほかならぬ命を超越する意志を持つことで、何百年の時空を越えることができるようになる。そこに真の癒し、があります」と語り、講演を締めくくった。



講演後、講演会場入口の墨絵の前で撮影に応じる藤原秀臣大会長、高柳和江研究会会長と佐賀純一氏